



業界創生人 KEY PERSON

東北・仙台発の専門葬儀社として、常にその動向が注目される葬祭業界のリーディングカンパニー(株)清月記。そのトップを務めるのが創業者の菅原裕典氏である。

小学5年生から、父方の本家で葬儀と関わり、1985年に独立・創業。以来、葬祭業の枠にとどまらない、柔軟かつ斬新な発想とアイデアで革新的な葬祭経営を実践してきた。近年では、「ゆりかごから墓場まで」を対象に、人のライフタイム(生涯・一生)をサポートするトータルライフサービス企業へと発展している。

多忙な合間を縫って、菅原社長の葬祭経営の原点とビジネスの源泉を伺った。

菅原裕典氏

(株)清月記代表取締役

100年企業の葬儀社・菅原一族の一員として 小学5年生から葬儀の世界に携わる

—父方の本家が葬儀社と伺っています。

父(菅原清一氏/故人)の本家が白壽殿という葬儀社を営んでいます。仙台から15kmくらい離れた塩竈の地で、100年以上続く老舗の葬儀社です。

六男だった父は仙台市内で国鉄(現JR)に勤めるサラリーマンでしたが、休日の日曜になると塩竈に行きよく葬儀の手伝いをしていました。そんな

家庭で育ちましたから、小学校の5年生くらいになると「ヒロも行くか」と、ごく自然に父に伴って塩竈に行くようになりました。当時(70年代はじめ)、塩竈で手伝いをすると1日500円貰えた。それから毎週のように、土曜の午後から40分くらい電車で揺られて1人で塩竈に行くようになり、夏休みには塩竈に居候して手伝うまでになっていました。小遣いもどんどん上がって、夏休みが終わると1日600円になり、冬休みも忙しいからと手伝うと、さらに100円上がって……(笑)。中学生の頃には、冬休み

すべての事業の源泉は 「お客様の喜ぶ顔を見たいから」、 これに尽きると思います。

が終わると10万円くらい貯まっていたね。

でも私にとって、小遣いの額はどうでもよかった。それよりも子どもながらに大人扱いをしてくれるのが、とてもうれしかったのです。

—そうした境遇や環境は、自然に受け入れていた。

「うちは葬儀屋だから……」という卑屈な感情をもつ人は大家族だった菅原一族に1人もいませんでしたし、精神的にも強い人しかいなかった。それだけ、葬祭業という職業にプライドをもって、真っ当な仕事をしているという意識が高かったのです。その血は自分にも脈々と流れているわけで、国鉄のサラリーマンの子どもというより、葬儀社の菅原一族の一員として育ったという意識が、ことのほか強かったと思います。

ですから、中学生になると従兄弟と一緒に病院に行きご遺体の搬送をし、さらに高校生になると、ジャンパーにネクタイ姿で警察署の霊安室に行き、かなり傷みの激しいご遺体の納棺までしていました。18歳(5月生まれ)になると車の免許をとれますから、6月にはもう霊柩車を運転していましたね。

—大学時代はどうされていたのですか。

その頃は、責任者として石巻を任されていた従兄弟が病気がちだったこともあり、私はよくそちらに出入りしていました。もう葬儀の仕事はひととおり身につけていましたから、従兄弟に代わって、搬送から打合せ、設営・施行、集金はもちろん、仏壇・仏具などの即売キャンペーンのチラシづくりから商品展示、会場設営・運営まで、すべてこなしていたわけです。石巻から車で1時間ほどかけて大学に通うのもしよっちゅうで、学生でありながら結構な額を稼いでいました。業界の間屋さんとも知り合いでしたから、全国のいろいろな葬儀社を見に行ったり、「実家(葬祭業)を手伝ってくれ」と学生の友人を

■清月記の概要

所在地/仙台市宮城野区日の出町2-5-4

設立/1985年3月

※関すがわら葬儀社として設立

代表者/菅原裕典

従業員数/450人

施行件数/2,600件(年間)

売上高/55億円(2016年4月期)

集めご馳走して葬儀の仕事を手伝ってもらったり、われながら、当時から親分肌の性格を遺憾なく発揮していたと思います。

「入口は狭いが奥は深い」

葬祭ビジネスの面白さを知った修業時代

—大学生でもう経営者並みの存在だったわけですから、独立は既定路線だった。

本家からは「大学を卒業したらここで働け」と言われていましたが、自分を含めて、親戚はみんな葬祭業に対して商魂逞しい前向きな人たちだったので、自分がここにいたら将来に輪揉めに発展するのは目にみえていました。本家の従兄弟たちが後を継いで社長や専務になれば、自分の居場所は確実になくなるわけです。ですから、卒業後は本家とは区切りをつけ、独立しようと思いを固めたのです。

そうと決めたら行動は速かった。卒業した23歳のとき、塩竈や石巻以外の葬儀も見たいと、まずは京都・公益社に向かいましたが、1年間という期間がネックとなって叶わず、そこで紹介してもらった名古屋の中京葬儀さんにお世話になったのです。

—そこで学んだことは。

中京葬儀は戦後、数社が合併してできた葬儀社です。研修に入ってみると、企業化が進んでいて家族主義的な経営でないよさを感じました。ここでは、経営者を目指しているのならば、「入口は狭いが奥は深い」葬祭ビジネスの面白さや真髄を学ばせても